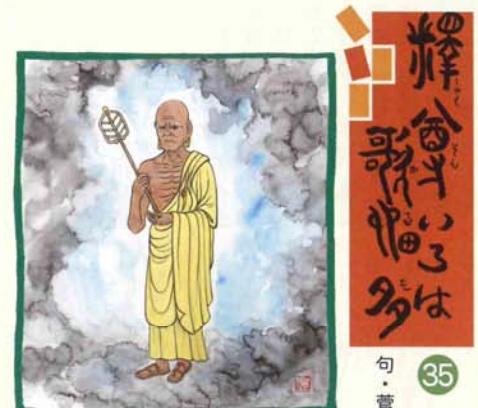


が力を入れたのは「産業活動」であった。はじめに手掛けたのは、引揚者や戦争未亡人に仕事を提供する「授産所」の設営であった。授産所の事業の中心となつたのは、肥料の増産であつた。ボロ布や払い下げられた軍保管物資の落下傘やハンモックの紐をほどいて糸にして、布を織りあげた。そうして生産された品物は、公定価格以下で販売する事が指導された。また、全国が凶作であるとの報を受け、千葉県の海岸で採取される「海菜」と同様、ゴウナという貝を碎いた肥料を生産し、各地へと送つた。こうした

またトコロ天の無料給食がはじめられたのもこの年の七月であった。静岡県の会員に呼びかけで大量的の天草を購入した聖憲は、役所の了解を得て、小学校の校庭で昼食時に一人一椀のトコロ天を無料で配布した。この活動は、そのことを見聞きした会員によって、関西や名古屋方面にも広がつていった。もちろん、このような行為によつてすべての人が満たされるわけではなかつた。しかし

が公布され、十二月には石炭や鉄鋼の重点生産を行なう「傾斜生産方式」に政策が転換され、六・三・二制の教育制度が採用された。新たな国作りがめまぐるしく社会状況が变化していく中で、聖闘士は復興を成し遂げる精神的な支柱に何を据えるかを見通そうとしていたのである。

て弟子の内智慧第一は舍利弗



絵・橋本豊治

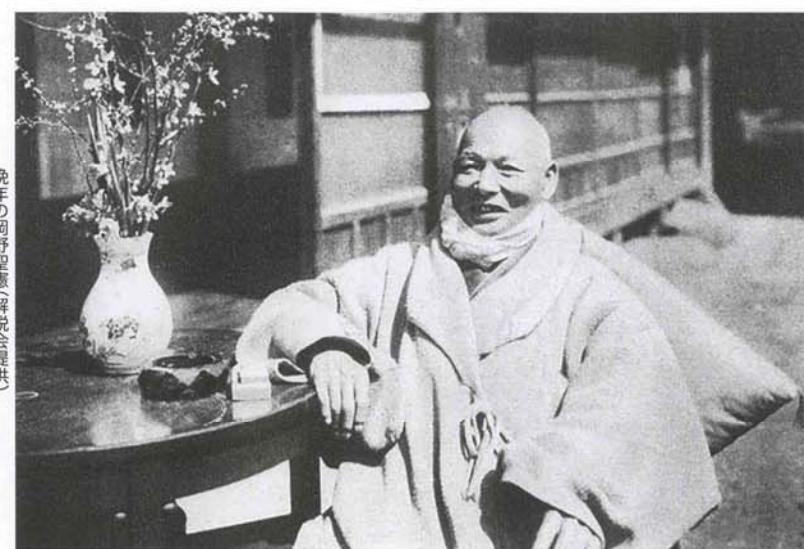
この行為を通じて聖憲が「奉仕する」ことの喜びや尊さを、会員に知らせ心積もりがあつたのだろう。

社会的には大きな動きのあつた一年である。五月には極東国際軍事裁判が開廷された。六月には「復員庁」が発足し、七月には肉親の安否情報を聞く「尋ね人」放送が始まった。九月には財閥問題への動きが始まり、十月に出された「農地調整法改正法」「自作農創設特別措置法」によつて地主制度が崩壊した。十一月には「日本国憲法」が公布され、十二月には石炭や鉄鋼の重点生産を行なう「傾斜生産方式」に政策が転換され、六・三・三制の教育制度が採用された。新たな国作りが着々と整えられていく中で、聖憲は復興を成し遂げる精神的な支柱に何を据えるかを見通そうとしていたのである。

平成28年4月1日 第627号

富士に祈る 70

國學院大學兼任講師 城崎 陽子



晩年の岡野聖憲(解脱会提供)

先回は、昭和二十年（一九四五）、空襲によつて日本各地が焼け野原になり、終戦の日を迎えるまでを記した。今回、復興の日々を産業指導にいそしみ、「我なきあと」を画る聖憲の歩みを記す昭和二十一年（一九四六）は、一月一日の「天皇人間宣言」で明けた。天皇と国民は「相互ノ信頼ト敬愛」によって結ばれており、「單ナル神話ト伝説」によるものではない事、また、「天皇ヲ以テ現御神トシ、且日本国民ヲ以テ他ノ民族ニ優越セル民族」だとする考え方を、「架空ナル観念」として否定した当該の詔書によつて、天皇は日本国民の民主化を果たす指導的役割との位置づけを得たのである。しかし、新たな時代が始まる一方で、国民はそれぞれの方々の向性をつかみきれないまま、生活に追われる日々

聖憲・その24

を過ごしていた。

一般的の神社では初詣が激減した正月であった。しかし、御靈地で行われた新年会には多くの会員が集まり、聖憲と共に新年を祝った。心づくしのおせち料理を会員と食べながら談笑する聖憲の姿は、いつもと変わらなかつたが、すでにこのころから持病が悪化し、歩行が困難になりつつあったのである。聖憲が「我なきあと」を意識しはじめたのはこの頃からだったのではないかろうか。

日本の軍國主義廃絶と、平和かつ民主的な日本政府の樹立を究極的目的としたGHQの政策が次第に徹底されつつあるなか、軍國主義の象徴とも受け止められた、「日章旗」を掲げてはならないという指令も出された。そこで行われた二月の「大日本精神碑建立記念祭」は、形状が「日章旗」に

上太陽は人間が宇宙の本源に感謝し、日々生かされていることの御礼を申し上げる碑である。この真理の前には敵も味方もない」と説いた。聖憲には、「新たな時代」が来ることによって、先祖が培つてきた民族的思想感情の結晶である、「日本精神」を過去として捨て、「新たな時代」のみを注視するあり方に警鐘を鳴らす心づもりもあつたのだろう。聖憲は、いかなる時代が到来しても、宇宙の本源に感謝し、日々報恩の誠を捧げて生活する、人間本来の生き方を失つてはならないことを考えていたのである。従つて、交通機関も充分に復旧しない状況の中で三聖地巡拝も、春の大祭も予定通りに行われたのである。一方で、感謝会館に「日直」を置くことが始められた。「日直」